た。今市市の自慢はなんだろうと子どもは周囲の人々はもちろんのこと、他県かたちは考え始めた。らの参加も増えだした。二宮尊徳先生ゆかりのまちでもあるし、今、世の中から喪失している子ども世界文化遺産の日光杉並木がある。自たちと大人の会話の場が生まれ出した。慢には違いないが大きすぎて子どもた同世代だけの付き合いではわからなかちの手ではどうにもならない。ったことが学べるようになった。中学生きれいな星空があるではないかとふとたちの考えを理解し相談に乗ってもらえ語った一人のこどもの言葉がほかの子どるような場ができ出した。もたちの目を開かせた。大都会では絶対観測会の夜には、付近の住民達が、観できない星の観察だったら子供たちだ測の妨げにならぬようにと自発的に戸外けでもできることだ。の明かりを消してくれるようになってき星に興味のある中学校の先生たちが天た。子どもたちの行為が大人の心に善意体望遠鏡を提供して指導してくれることの変化を起こした。になった。中学生たちが集まって平成六子どもたちから「光害」のないまちづ年春に「星を見る会」がスタートした。くりという新語が出るようになってき栃木県今市市の隣は東照宮で名高今まで肉眼で見ていた星は点だったのた。い日光市である。隣が有名なので今に、望遠鏡をのぞくと想像もつかなかっスタートの翌年には「星を見る会に」市の子どもたちは今市市に住んでいた世界が広がった。観測会のたびに子どに日本生命財団から、青少年の健全育成ると胸を張って言えなかった。もたちは感動の連続だった。この感動をという評価で一〇〇万円の寄付が出た。自分の国に自信をなくさせるよう他人にも分けてあげたいと、毎回の会場直径三〇㎝の望遠鏡が手に入った。な教育を子どもたちにしている国はの下原地区コミュニティーセンター周辺この会の成果は星を見るにとどまら滅んでしまっていると今市の中学生の住民を子供たちが誘った。ず、子どもたちから高齢者までの人たち達は学校の授業の中で教わった。今独りよがりと批判される現代の中学生が気楽に話のできる場がつくられたこと市に自信が持てないと今市もなくなたちが感動を大人にまで広げたいと行動に大きな意義がある。るのではないかとだれかが言い出しに出たことが特にすばらしい。観測会に「星空の公民館」とでも名付けようか。（日本ふるさと塾主宰）